様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１７日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２００５９
研究課題名（和文）　ポスト災害社会における宗教の役割に関する宗教学的研究

研究課題名（英文）　The Study on the role of religions in post-disaster societies

研究代表者
木村　敏明（KIMURA TOSHIAKI）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：８０３２２９２３

研究成果の概要（和文）：2004 年 12 月のスマトラ沖地震以降いくつかの巨大な地震を経験したインドネシア・スマトラ島各地での現地調査などを通して、復興の過程で宗教が果たした役割と、その後の社会における宗教の位置づけの変化について分析をおこなった。その結果、「宗教国家」インドネシアにおいて通常ゆるぎない権威をもち人々の生活を枠づけている「宗教」が、震災をめぐってゆらぎを見せ、そのことが諸宗教間の協力や対立、あるいは住民たちとの葛藤など様々な動向を生み出していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this project, I tried to clarify the role that religion played in the process of reconstruction after great disaster and the changes in the social position of religion through the field research in Sumatra Island where was suffered by some great earthquakes since 2004. As a result, it became clear that the established authority of “religion” in Indonesian society came into question in the face of desolation of disaster and that forced to reconfigure the social position of religion in Indonesia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：災害と宗教、インドネシア、集団埋葬、宗教間協力

１．研究開始当初の背景

(1) 代表者のインドネシア・スマトラ島における調査。90 年代から代表者が継続的におこなってきたスマトラでの調査の中で、インドネシア社会における宗教の位置づけが震災を通して大きな変化をとげつつあるのではないかという感触を得た。

(2) 先行研究。当時、災害と宗教について論じた先行研究はそれほど多くはなかった。災害と復興の問題が文化的、宗教的な次元でも論じられるべきだとする見方は一部の研究者によって指摘されていたが、その重要性が広く認められていたとは言い難かった。

２．研究の目的

(1) 研究は未曾有の大災害によって壊滅的打撃を受けながらも復興を遂げつつある、インドネシア・スマトラ島の社会を事例としつつ、復興のプロセスにおいて宗教がいかなる役割を果たし、またそのことが当該社会における宗教の位置づけにいかなる変動をもたらすかについて調査研究をおこなうことを目的とした。

(2) 大災害からの復興という問題に宗教学的視点からアプローチすることで、ともすれば援助の技術論的な問題に片寄りがちであった災害研究に、文化論的な視点を導入することをめざした。つまり、援助を受ける被災者たちが外部からの援助の単なる受動的な受け手ではなく、一定の文化的宗教的な背景をもち、その枠組みの中で自らの置かれた状況の解釈や未来への希望をもち、援助者と関わっている様子を明らかにできると考えた。

３．研究の方法

(1) 本研究では被災の状況とその後の諸宗教の動向を、統計や文献資料をもとに、マクロな視点からとらえる一方で、当該社会における聞き取りや参与観察による質的なデータを用いて被災住民たちの経験世界を分析の対象とした。

(2) 被災地における宗教の役割の問題へと多角的にアプローチするため、三つの研究分野（①コスモロジーと災害観②死生観と慰霊③教団活動と救い）を設けた。

①コスモロジーと災害観分野では、住民が震災そのものや自らの被災経験をどのように位置づけているかを、宗教的世界観や神話との関連において分析することとした。

②死生観と慰霊分野では、震災による大量の死者に被災住民や諸教団がいかに向き合ったかを住民の死生観との関連で分析することとした。

③教団活動と救い分野では、現地で活動する内外の宗教教団について、それらがいかなる物心両面での救いを住民にもたらし、またそれがいかなる変化を社会にもたらしたかを分析することとした。

４．研究成果

(1) スマトラ島の被災地二か所（ニアス、アチェ）に関し、それぞれ州の統計より主な宗教の宗教施設数の変動をみることで、震災前後のそれらのマクロな変化を捉えることを試みた。その結果、それぞれの地域がそれぞれの事情を反映しつつ、いずれの場合にも諸宗教間の勢力のバランスが変化している様子をうかがうことができた。

① ニアス島はもともと住民の大半がキリスト教プロテスタントの信者であるが、震災以降、プロテスタント教会およびモスクが急増していることが明らかになった。

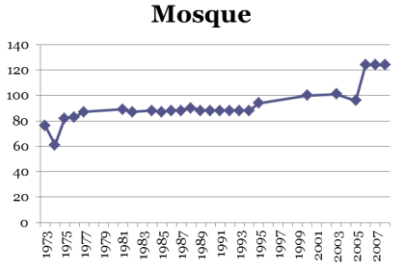

図１．ニアスにおけるモスク数

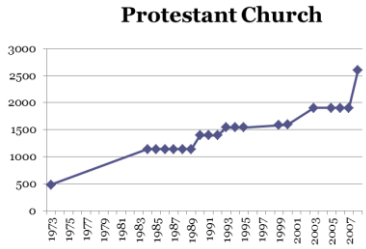

図２．ニアスにおけるプロテスタント教会数

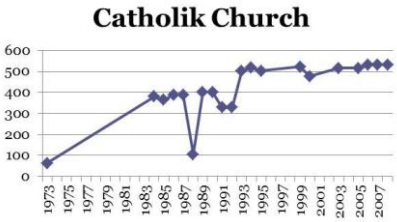

図３．ニアスにおけるカトリック教会数

② 伝統的にイスラームの信者の多い地域であるアチェでは、震災の前後でプロテスタント教会の数の増減が激しくなっている。震災以前に一時的にポロテスタント教会が増加したものの、震災後その数は極端に少なくなっている。これは震災後のアチェの政治的変化に伴い、キリスト教会に対する地方政府

の規制が強化されたことによるものと考えられる。

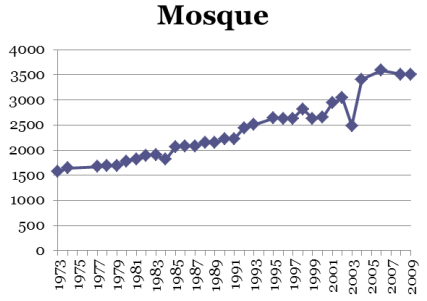

図４．アチェにおけるモスク数

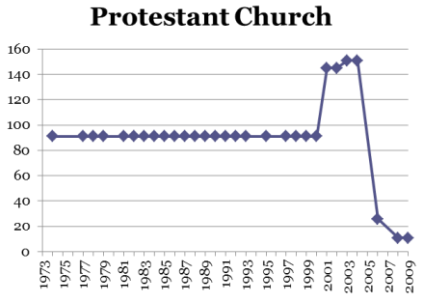

図５．アチェにおけるプロテスタント教会数

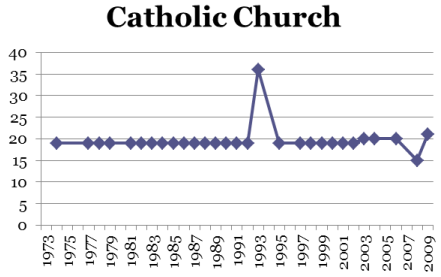

図６．アチェにおけるカトリック教会数

(2) コスモロジーと災害観分野では、北スマトラ大学の大学生を対象としたアンケート調査(N=148)をおこない、その結果を分析した。その結果以下の点が明らかになった。

① 地震の原因に関する神話を尋ねる設問(自由回答)に対しては、知らないとする回答が多数を占めたが、25 名が龍蛇(naga)を挙げた他、牛(sapi)、魚(ikan)、巨人(raksasa)神(Dewa)という回答が 4 名ずつあった。スマトラ一帯は地震の原因を龍蛇に見る文化圏にあるという大林らの指摘が今日でも当てはまることが確認された。

表１．地震の原因

龍蛇	25
牛	4
魚	4
巨人	4
神(Dewa)*	4
ミミズ	1
カエル	1
ブタ	1
巨大獣	1
幽霊	1
土地の霊	1

＊Dewa という語は通常、キリスト教、イスラームの神とは異なる在来の神々を指して用いられる。

② 一方、回答者自身が地震の原因についてどう思うかという設問（自由回答）では、科学的な説明と宗教的な意味付けの双方に言及している回答が目立った。またその場合、科学的に見た自然現象の偶然性と宗教的に見た神の意志の不可知性が、地震の原因の測り知れなさという点で重ねあわされた回答が多い。エリート学生における自然科学と宗教の関係を考察するうえで興味深いデータである。

(3) 死生観と慰霊分野では、震災後に大おこなわれた集団埋葬墓 mass grave に注目した。調査地点としてはニアスとアチェに加えて、西スマトラ州パダン・パリアマン県の事例も加えて分析をおこなった。

① ニアスにおいては、大きな被害がでたグヌンシトリ市において、身元を確認することのできなかった十数名を中国人墓地の一角に集団埋葬している。埋葬された人々の宗教は確認のすべがなかったため、地元のプロテスタント、カトリック、イスラーム、仏教の５４団体の指導者が集まり、埋葬をおこなった。その後もこの協力関係は維持され、毎年慰霊祭をおこなっている他、政府からの援助金の受領と分配といった役割を果たしたことが分かった。

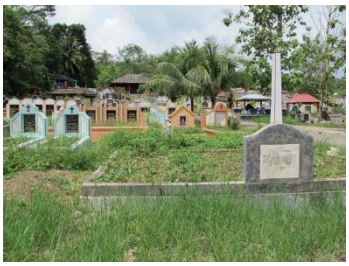

図７．グヌンシトリ集団埋葬墓

② アチェにおいては、その広域にわたる甚大な被害のため各地で大規模な集団埋葬が行われている。イスラームが圧倒的な多数を占めるため、その埋葬や慰霊行事等に関しても基本的にイスラームが主導して行われている。集団埋葬墓の入り口にクルアーンの語句が刻まれていたり、祈りのための小冊子が置かれていたりといったムスリムへの配慮が見られた。

図８．アチェの集団埋葬簿の門に記されたクルアーンの章句

③ パダン・パリアマンの事例は、上記の二つの場合と異なり、地震に伴うがけ崩れによって村が土砂に埋没し、そのまま集団墓地とされたという事例である。県政府は村を集団墓地とする決定を正当化するためにインドネシアを代表するイスラーム法学者の組織 MUI へと諮問をおこない、それを是とする答申（ファトワ）を得た。しかし、地域住民と地元政府はその決定に対し不服を申し立て、遺体捜索の実行を主張した。この事例の分析から、インドネシアにおいて通常疑われることなく確立している宗教の権威が集団埋葬をめぐってゆらぎ、宗教のもと潜在化していた慣習法的主張が表面化していることが明らかとなった。

(4) 教団活動と救い研究分野では、主にニアス島におけるキリスト教系ＮＧＯの活動を分析の対象とした。震災以後にニアスに拠点を設けて活動をしてきたＮＧＯの中には撤退してしまったものも多いが、カトリック系のカリタスのように、現在までとどまっている団体もある。活動内容の分析からは、長期にわたって活動している団体では、当初の医療や援助物資の支援から、生活改善による社会の脆弱性の克服へと焦点を変化させていることが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 木村敏明、震災と向き合う宗教－東日本大震災以降の動向、宗教と現代がわかる本、査読有、2012 年号、2012 年、pp26-35。
② 木村敏明、震災死者と宗教―インドネシア・スマトラにおける集団埋葬の事例から、現代宗教、査読有、2012 年号、2012 年、pp158-173。
③ 木村敏明、地震と神の啓示―西スマトラ地震の事例より―、東北宗教学, 査読有、vol.5、2010、pp19-36。

〔学会発表〕（計９件）

① Toshiaki Kimura, Reconfiguring the religious role in post-disaster society -the social impact of mass graves in Japan and Indonesia., The Australia Sociological Association, 2012 年 11 月 27 日, The University of Queensland: Australia.
② Toshiaki Kimura, Mass graves after megaquake, International Symposium Salvage & Salvation -Disaster, Religion and Rehabilitation, 2012 年 11 月 23 日, National University of Singapore :Singapore.
③ 木村敏明、ポスト震災社会における宗教―スマトラの事例から,日本宗教学会、2012 年 9 月 8 日、皇學館大學。
④ 木村敏明、西スマトラ震災後の集団埋葬をめぐる葛藤―住民・宗教者・地域政府、印度学宗教学会、2012 年 6 月 3 日、東北福祉大学。

６．研究組織

(1)研究代表者

木村　敏明（KIMURA TOSHIAKI）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80322923

(2)研究分担者

鈴木　岩弓（SUZUKI IWAYUMI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50154521
（H24：連携研究者）
山田　仁史（YAMADA HITOSHI）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90422071
（H24：連携研究者）